

体験と創作のあいだ

——『無情』の再読(下)——

波 田 野 節 子

【要旨】「李光洙の第二次留學時代——『無情』の再読(上)」において、筆者は、李光洙が第二次留學時にどのような体験をもったのかを考察した。その内容をふまえ、本稿では、李光洙の体験したことが創作にどのような反映されたかを考察する。李光洙は東京に来てすぐに女子美の画学生羅惠錫とその兄羅景錫を知り、肺結核を発病したところに東京女子医専の医学生許英肅と出会った。彼女たちは長編『無情』の登場人物に投影され、また李光洙のこのあとの作品にも影を残すことになった。

目 次

一、はじめに

二、第二次留學期に書かれた小説

(一)「少年の悲哀」「尹光浩」「彷徨」

(二)『無情』

(三)「クリスマスの夜」「幼い友へ」

(四)『開拓者』

三、李光洙と羅惠錫の接点

四、『無情』における善馨の地位

体験と創作のあいだ(波田野)

- (一)「特權的な配偶者」モチーフ
(二)「無情」と結核
(三)「無情」と許英福
五、おわりに

一、はじめに

筆者は一九九〇年代に、李光洙の長編『無情』(一九一七)に関するいくつかの論文を書いた。⁽¹⁾そこでは李光洙の出生から『無情』を書くにいたる道筋をたどり、『無情』と同時期に発表された啓蒙論説文を検討してから、小説『無情』を分析した。そして『無情』の主人公である李亨植には作者自身の、亨植が棄てる朴英采には作者が棄てようとしている妻の姿が投影されていると推論した。⁽²⁾だが論文を書きおえたあと、筆者にはいくつかの疑問が残っていた。最大の疑問は亨植と金善馨の愛情形態に関するものだった。善馨と亨植との婚約は金長老が決めたことであり、善馨にとってそれは服すべき至上命令だった。亨植は善馨が自分を本当に愛しているかどうかを疑って煩悶する。なぜ李光洙は彼らにふつうの恋愛をさせなかったのか。また小説の後半部では、善馨の私の強さや嫉妬の醜さが強調され、英采の方がむしろ魅力的に描かれているにもかかわらず、善馨の優位がゆるがないことも不思議だった。亨植にとって、なぜ善馨はあれほどまでに絶対的な存在なのか。そもそも『無情』の冒頭における英采と亨植のすれちがいが象徴するように、作者は善馨の勝利を最初から予定しているが、これは何を意味しているのか。これらの疑問は、作品分析だけでは解けないように思われた。

もう一つの疑問は、英采と車中で出会って自殺を思いとどまらせる東京留学生金炳郁に関するものである。論文執筆後に羅憲錫の小説「瓊姫」(一九一八)を読んで、筆者は驚いた。⁽³⁾家事を理性的かつ芸術的に楽しみながら行なう主人公瓊姫の人間像が、金炳郁にそっくりだったからだ。炳郁も瓊姫も東京留学生であり、父に結婚

を強要されることも共通している。なぜこのような相似が生じたのか、李光洙と羅憲錫とのあいだにどんな関係があったのか、知りたいと思ったが、当時は資料がなかった。⁽⁴⁾

二〇〇六年度から三年間、筆者は日本学術振興会から科学研究費の助成を受けて「植民地期朝鮮文学者たちの日本体験に関する総合的研究」を行なった。植民地時代に日本留学した作家たちを調査しながら、李光洙の第二次留学時代の足どりを集的に調べたところ、この時期における彼の体験と創作との関連様相がおぼろげながら浮かび上がってきた。体験に関しては先に書いた論文「李光洙の第二次留学時代——『無情』の再読(上)——」で報告したので、本稿ではその内容を踏まえて、かねてからの疑問の解明作業をこころみたい。李光洙が東京で体験したできごとが、『無情』をはじめとするこの時期の李光洙の創作にどのような形で反映しているか、そして、その後に書く小説にどのような影響を与えることになったかを考察するのが本稿の目的である。

二、第二次留学期に書かれた小説と羅憲錫

李光洙が東京に来た一九一五年の夏から上海に亡命する一九一九年二月までに発表された小説で、現在確認されているものは以下の七編である。

タイトル⁽⁵⁾

掲載誌／紙

掲載時期

(執筆日付)

- | | | |
|-----------|---------|------------------------|
| ①「크리스마스밤」 | 【學之光】八号 | 一九一六年三月五日 |
| ②「無情」 | 【毎日申報】 | 一九一七年一月一日、六月二十三日 |
| ③「少年의悲哀」* | 【青春】八号 | 一九一七年六月十六日(一九一七・一・一〇朝) |

体験と創作のあいだ(波田野)

- ④「彷徨」* 「青春」十二号 一九一八年三月十六日(一九一七・一・一七東京麹町에서)
⑤「尹光浩」* 「青春」十三号 一九一八年四月十六日(一九一七・一・一一夜)
⑥「어린 벗에게 一・二信」 「青春」九号 一九一七年七月二十六日
「어린 벗에게 三信」 「青春」十号 一九一七年九月二十六日
「어린 벗에게 四信」 「青春」十一号 一九一七年十一月二十六日
⑦「開拓者」 「毎日申報」 一九一七年十一月十日、一九一八年三月十五日

(一)「少年の悲哀」「尹光浩」「彷徨」

これらのうち①②⑥⑦は執筆されるとすぐに新聞か雑誌に発表されているが、*印をつけた③④⑤の三編は、発表が執筆の時期とかなりずれている。作品の末尾に記された執筆日付によれば、この三編は「無情」の連載が始まったばかりの一九一七年一月十日から一週間のあいだにいつい書かれたものである。本稿の(上)において筆者は、李光洙は冬休みに不眠不休で「無情」の約七十回分を書いたところに結核を発病したと推論した⁽⁶⁾。死を意識した李光洙が過去と現在の自分の姿を見つめながら一氣に書いたのが、冬休みが終わったころ書かれたこの三つの短編だったと考えられる。

③「少年の悲哀」は、白痴との結婚が決まった従妹を救おうとして果たせなかった少年が、いまは一児の父になつていふという話である。作中の従妹には、三十年後に書かれる自伝的長編「私」に登場する故郷の初恋の人シルタンの面影があり⁽⁷⁾、東京から二年ぶりに帰省した主人公が三歳になったわが子と対面して、少年の日が過ぎ去つたことを痛感する場面には、李光洙が前年の夏に帰省したときの体験が反映されていると思われる。また、東京に留学した尹光浩が同性に失恋して自殺する⑤「尹光浩」は、中学時代に書いた日本語小説「愛か」のプロ

ットを額縁小説にして発展させたもので、この二編は作者自身の過去を映し出したものだが、④「彷徨」に描かれているのは作者の現在である。麹町の寄宿舎で病に臥しながら虚無感におそわれている留学生は、死に至る病にかかった作者自身の姿であろう。これについては本論文の後半で詳しく考察する。

注目されるのは、特殊な状況で一挙に書かれたと思われるこれら三編をのぞくと、残る四つの作品すべてに、羅憲錫を思わせる人物が登場していることである。そこには、主要人物として兄と妹が登場する〈兄と妹〉モチーフ、妻ある男性が未婚女性を恋する〈既婚者の恋〉モチーフ、男性が既婚であることを理由に未婚女性の兄が二人をひきさく〈兄の反対〉モチーフ、そして、そもその出会いは兄が妹を主人公に紹介したり、あるいは保護を頼んだことであるという〈兄の紹介／委託〉モチーフが共通してあらわれている。そこでまず、これら四つの作品を検討することにする。

(二)「無情」

先述したように、②「無情」に登場する東京留学生の金炳郁は、羅憲錫の短編「瓊姫」の主人公ときわめてよく似ている。「瓊姫」は「無情」連載の翌年に東京の女子留学生雑誌「女子界」二号に発表された。おそらく李光洙は同じ時期に留学していた羅憲錫をモデルにして金炳郁という人物を造形し、一方で羅憲錫は自分自身をモデルとして「瓊姫」を書いたために、このような相似が生じたのだと考えられる。炳郁は音楽、瓊姫は美術を学んでおり、羅憲錫は私立女子美術学校の画学生である。瓊姫には兄がおり、炳郁には金炳國、羅憲錫には羅景錫がいる。瓊姫も炳郁も父親から結婚を強制されて悩み、羅憲錫は父の結婚強制に反発して学校を一時退学して生活費を稼ぐという経験をしている。瓊姫に恋人はいないが、炳郁には留学生である恋人がおり、羅憲錫は慶応大学に留学した詩人崔承九との恋愛が有名である。なによりも共通する点は、瓊姫と炳郁が家事を芸術と結びつ

けて生き生きと行なう姿である。瓊姫は竈の火のはぜる音に微妙な美感を感じ、納戸の整理にも東京で学んだことを楽しみながら応用する。一方、炳郁は家に花を植えることが生活のなかに美を求める行為であることを自覚している。李光洙と羅蕙錫のあいだにあった芸術と生活に関する共通した見解が、それぞれの作品にあらわれたのだと推測される。男性的ともいえる闊達な炳郁の性格はおそらく羅蕙錫のものでもあったのだろう。なお、『無情』では〈兄と妹〉モチーフのほか、妻のある炳國が英采を思慕して苦しむという設定に〈既婚者の恋〉のモチーフが使われているが、〈兄の反対〉と〈兄の紹介／委託〉モチーフは出てこない。

(三)「クリスマスの夜」「幼い友へ」

つぎに、①「クリスマスの夜」⁽⁹⁾と⑥「幼い友へ」を検討する。執筆時期が一年以上はなれた作品をならべて考察するのは、この二編には〈兄と妹〉〈兄の反対〉〈既婚者の恋〉モチーフが使われているほか、細部でおどろくほどの相似を示しているからである。

「クリスマスの夜」の主人公は、七年ぶりに東京に再留学した金京華である。クリスマスの夜に「会堂」に行った京華は、ピアノの演奏者を見て驚く。前の留学時に愛したO嬢だったからだ。彼女に対する想いに堪えきれずに出した手紙が彼女の兄の目に触れ、彼は絶交の宣告を受けたうえ留学生界で白眼視された。絶望した彼は鉄道自殺を企てるが失敗して帰国し、その後さまざまな経験をしたのち、ふたたび東京に留学したのだった。作中で回想される京華の過去には、李光洙自身の過去が織り込まれている。⁽¹⁰⁾

一方、「幼き友へ」は、主人公の林輔衡が「ユウ(あなた)」宛の四通の手紙で自分の体験を語る書簡体小説である。六年前、東京に留学した林輔衡は友人金一鴻から妹の一蓮を紹介されて、彼女を恋するようになったが、既婚者であったために一鴻に反対されて絶望し、大陸放浪の旅に出た。上海で病気に倒れた彼を見知らぬ中

国女性が看病して姿を消し、残された手紙から彼女がじつは一蓮であったとわかる。このあとロシアに行くために乗った船が水雷で難破し、騒ぎのさなか彼は一蓮と再会してともに救助される。そしてシベリアに向かう寝台車のなかで、彼女から身の上話を聞くのである。

「クリスマスの夜」と「幼き友へ」の相似点は、東京が舞台の部分に集中している。二人が初めて会う場所は、前者では女学校の応接室であり、後者では寄宿舎の応接室である。O嬢も一蓮も、髪は横わけておさげを垂らしており、二人とも「お忙しいのに」という言葉を口にする。⁽¹¹⁾失恋のあと主人公が鉄道自殺を企図して未遂に終ることもまったく同じである。これほどまでに細部が似ている小説をたった一年の間隔において発表できたことは、「クリスマスの夜」が読者の手に届かなかったという事情が関わっている。この作品が載った『學之光』八号は発刊と同時に警察に押収されたために、「幼き友へ」に同じ特徴をもった女性が登場しても混乱がおきる心配はなかったのである。この『學之光』八号に李光洙は、「クリスマスの夜」のほか、論説「龍洞(農村問題研究に関する実例)」と詩「幼き友へ」を載せていた。そして読者の目に触れないで終わったこの詩のタイトルを、その一年後に発表した書簡小説のタイトルとして用いたのだ。⁽¹²⁾ここには、こんな特徴をもつ女性をぜひとも小説に登場させたいという李光洙のこだわりが感じられる。そのこだわりの対象が羅蕙錫であった。金一蓮が愛した留学生が肺病で夭折した天才詩人という設定は、あきらかに、羅蕙錫の恋人でやはり肺病で夭折した詩人崔承九を念頭においたものである。

これまで「幼き友へ」は、そのタイトルが示すように幼い同胞に向けた書信の形をとった小説だと解釈されてきた。⁽¹⁶⁾だが、見たように、これはもともと詩のタイトルであって、最初から「幼き友」に向けて書かれたものではない。そもそも幼い同胞に「ユウ(あなた)」と呼びかけて、敬語を用いるのはおかしい。これが愛する女性に向けられた手紙であることは、後半へと読み進むにつれてはつきりしてくる。

上海からウラジオストックに向かう船中で、主人公は「あなた」への手紙に、「ここからまっすぐ北に飛んでいけば、あなたがいらつしやる故郷のはずです」と書いている。そして月の光に照らされる波を見ながら、「こんななかでも脳裏から離れないのは恋人のことです。あなたと一蓮への思いは心中に雑念がなくなるほどに、いよいよ鮮明で切実なものとなるのです」と語りかけ、「この波に彼らの手をとって逍遙したならば」と夢見る。このあと難破さわぎのなかで金一蓮と再会して救助された彼は、シベリアに向かう寝台車で金一蓮からこれまでの身の上話を聞き、「あなた」への想いをはっきりと意識して、次のように詠いあげるのである。

「なにゆえに私は生まれ、なにゆえに金一蓮は生まれ、なにゆえにあなたは生まれたのでしょうか。そして私はなんのために小白山脈を走り、あなたはなんのために漢江のほとりにとどまっているのでしょうか」⁽¹⁷⁾

「あなた」がいる場所は「漢江のほとり」、すなわち京城である。書簡小説「幼い友へ」は、一蓮との数奇な運命を別の女性に手紙で語りながら、二人の女性のあいだで心をさまよわせていた男性が、ついに手紙の相手を選ぶまでの過程を描いた作品と見るべきである。そしてそれは、この時期における作者の状況を反映していたのである。

(四)「開拓者」

東京留学時代に書かれた最後の小説⑦『開拓者』でも、〈兄と妹〉は中心モチーフである。ヒロイン金性淳^{キョウジン}は東京で化学を学んだ兄金性哉^{キョウセイ}がいる。民族主義者の彼は特許をめざして自宅でひとり実験をつづけるが、数年つづいた失敗のために家産を蕩尽し、性淳を金持ちの友人に嫁がせることで危機を脱しようとする。性淳は画家

の悶^{モウ}股^コ植^シと愛しあっているが、彼は既婚者である。家族に結婚を強制された性淳はついに劇薬を飲んで自分の意思を貫徹し、家族と股植に見守られながら死んでいく。ここでも〈既婚者の恋〉〈兄の反対〉というモチーフが使われており、この時期の李光洙がこれらの問題にいかにか強くとらわれていたかをうかがわせる。

李光洙が東京で書いた小説には、なぜこれらのモチーフが頻出するのか。その理由は作品の外、すなわち作者がこの時期に置かれていた状況に求めなくてはならない。留学生の李光洙には故郷に妻と子がいた。東京で若い女子留学生たちと交流しながら、彼は自分が〈既婚者〉であることをいやでも意識せざるをえなかったのだろう。そして実際にこれらのモチーフを触発したのは、羅憲錫とその兄羅景錫との交流だったと推測される。そこで、以下ではこの時期の李光洙と羅憲錫の行動を対照して、彼らの接点をさぐることにする。

三、李光洙と羅憲錫の接点

女子の留学がまわった当時、羅憲錫を東京に留学させたのは兄の羅景錫だった。一九一〇年に日本に渡り、蔵前高等学校(現在の東京工業大学)付属工業専門部応用化学科に学んだ羅景錫は、女性にも新学問が必要だと考えて、父母を説得したのである。こうして一九一三年に羅憲錫は東京の私立女子美術学校に入学する。西洋画選科普通科に入った彼女は途中休学して一年遅れ、三年生の秋に高等師範科二年に転科して、一九一八年に卒業した。⁽¹⁸⁾五年間の在籍である。羅景錫は、羅憲錫が二年生のときに蔵前高等学校を卒業している。⁽¹⁹⁾当時の官憲資料『朝鮮人概況第二』の「在阪朝鮮人親睦会」の項に羅景錫の名前が見えることから、卒業後の彼の行動をおおよそ推定することができる。大阪では一九一四年に鄭泰信という人物が中心となって朝鮮人団体の活動が始まり、一九一五年初めに鄭が姿を消したあと羅景錫が中心となったが、九月に羅が帰国すると活動が先細りになったという。この資料から推測すると、羅景錫は一九一四年七月に高校を卒業してから大阪の民族団体で活動し、翌年

九月に父の具合が悪くなつて帰国したのだと思われる。父親はこの年十二月に亡くなっている。

羅景錫は大阪に行くとき、妹の保護を留学生仲間の崔承九に頼んだのだろう。二年生になった羅惠錫は崔承九と愛しあうようになり、また、このころ彼が印刷人をしていた『學之光』三号(一九一四年十二月発行)に「理想的婦人」という論説文を載せている。このあと羅惠錫は父から学校をやめて結婚するよう迫られるが、断固として拒否し、学費を出さないと威す父に反抗して、驪州にある普通学校の教員になつて学費を稼いだ。このために三学期は日本にもどれず、四月の新学期にいったん除籍されている。彼女が女子美に復学したのは、この一九一五年の秋、二学期なかばの十月四日のことだ。⁽²⁵⁾この間に李光洙が東京に来て、九月三十日に早稲田の予科に入學している。したがつて兄妹と李光洙が出会つてモチーフの源になるような出来事がおきたのは、この年の夏から秋ということになる。⁽²⁶⁾推測だが、九月に日本を離れることになった羅惠錫は、結核にかかった崔承九に妹を任せることを躊躇し、東京に来たばかりの李光洙に妹を紹介して保護を頼んだのではあるまいか。「幼き友へ」に見られる〈兄の紹介〉モチーフは、このあたりに淵源があると思われる。⁽²⁷⁾李光洙は羅惠錫から紹介された羅惠錫に心を惹かれ、それに気づいた兄がきびしい制御をかけたといういきさつが、〈既婚者の恋〉と〈反対する兄〉のモチーフにつながつたのであろう。この年末には羅惠錫の父が亡くなり、翌年初めに恋人の崔承九も死亡する。羅惠錫がひそかに帰国して見舞つた直後の死だった。そして三月に刊行された『學之光』八号には、羅惠錫をモデルとした短編「クリスマス夜の夜」と崔承九の死亡記事が同時に載つたのである。

その後の李光洙と羅惠錫は、友人という間柄になつたのではないかと想像される。押収された「クリスマス夜の夜」を羅惠錫が読むことができたかは不明だが、『無情』と「幼き友へ」は読んだはずであり、自分がモデルであることは知つていたに違いない。『開拓者』も、主人公の兄が化学者で恋人が既婚者であるという設定を見れば、イメージされているのは自分だと思つたことだろう。だが周囲の注目を受けることに慣れた彼女は、さほど

気にしなかつたのではなからうか。のちに、廉想渉が必ずしも好意的でない書き方で彼女をモデルにした小説『ひまわり(해바라기)』を新聞に連載したときも、単行本を出すときには表紙のデザインをしてくれたという逸話が残っているほどであるから、⁽²⁸⁾闊達でさっぱりした性格だつたのだろう。

『開拓者』の連載がはじまるころ、羅惠錫は許英肅とともに『女子界』の編集部員として、賛助の李光洙といつしよに仕事をしている。⁽²⁹⁾このころ李光洙と許英肅は相愛の仲であり、羅惠錫はこの二年後に結婚することになる金雨英と交際中であつた。上海に亡命したあとも、李光洙が許英淑への手紙のなかで、羅惠錫の結婚相手にびつたり的人物がいるから彼女の意向を打診してくれと冗談まじりで書いているのを見ると、⁽³⁰⁾彼女のことはつねに念頭にあつたようである。

だがその後、李光洙の小説から羅惠錫の面影は薄れていく。一九二五年に『朝鮮文壇』に発表した短編「愛に餓えた人びと(사랑에 주련던 이들)」(未完)では〈兄と妹〉モチーフのみ使われて他のモチーフは併用されず、妹の影もすっかり薄くなっている。翌年刊行した小説集『若い夢(젊은 꿈)』には「幼き友へ」を「若い夢」と改題しておさめ、⁽³¹⁾序文に、「幼稚なところもあるがすべて手をつけずにそのままにした。私にとつてそれは命のひとつかけら——若い夢のひとつかけらであるから、手をつける気にならなかつたのだ」と書いたが、⁽³²⁾執筆時期については「一九一四年に大陸放浪からもどつて五山にいたとき」だとして、おそらく意図的にずらしている。このころ羅惠錫は外交官金雨英の妻で二児の母であり、画家として活躍する有名人だつた。李光洙は、この作品が羅惠錫と結びつけられることを避けたかつたのだろう。⁽³³⁾それから十年たつて『彼の自叙伝』(一九三六)に、これらのモチーフはさらに薄められて変形された形であらわれるが、⁽³⁴⁾同じ年に発表した随筆「余の多難な途程(多難한 半生의 途程)」のなかで彼は、「幼い友へ」の金一蓮は上海で病に倒れたとき自分を献身的に看病してくれた申性模という男性を女性として描いたものであると書いて、⁽³⁵⁾ヒロインと羅惠錫とのつながりを断ち切っている。⁽³⁶⁾

なぜこんなことを書いたのだろう。数年前に不倫が原因で離婚した羅憲錫は、この二年前に離婚のいきさつを書いた「離婚告白状」⁽³⁸⁾を雑誌に発表し、崔麟を相手に貞操蹂躪に対する慰謝料の請求裁判をおこして世間の注目を浴びていた。「彼の自叙伝」連載の前年にも、自らの不倫を素材にした戯曲を発表している。⁽³⁹⁾李光洙は、そんな彼女を自分の「若い夢のひとつ」にしておきたくなかったのではあるまいか。⁽⁴⁰⁾

四、「無情」における善馨の位地

「無情」の善馨は不思議な存在である。富と美しさと教養によって一瞬で亨植の心を奪った彼女は、後半では我欲と嫉妬にかられた醜い姿を見せる。筆者は以前の論文で、一方的に「見られる」存在だった善馨が亨植を「見る」という行為を始めたときにこの変貌が起きていることを指摘し、「無情」の作者が求めた近代的恋愛においては、恋愛の相手は必然的に「自我」と対立する「他者」でしかありえず、そうした相克の関係に対して作者が抱いた拒否感が善馨の変貌の醜さとしてあらわれた、と分析した。⁽⁴¹⁾ところが、こんな拒否感にもかかわらず、善馨は亨植にとって最後まで絶対的な存在なのである。本章では、「無情」における善馨の位地が何に由来するものかを、作品の外を視野に入れて考えてみたい。

(一)「特権的な配偶者」モチーフ

筆者が善馨という存在に疑問をいだいたのは、彼女が「無情」においてあまりにも特権的な地位を与えられているためだった。「無情」では、亨植が善馨を選ぶことは最初から決められている。冒頭、亨植が安洞の金長老の家で善馨と初対面の挨拶をかわしていたころ、英采は亨植がいない校洞の下宿を訪ねていた。このすれ違いが彼らの運命を決定したのである。一ヵ月後に車中で英采の生存を知った亨植は、二人の女性との出会いをふりか

えり、あの日の自分は善馨から強烈な印象を受けてしまったため、英采に会ったときには彼女を「第二」と思わざるをえなかったと、出合いの順序が大きな影響をあたえたことを認めている。⁽⁴²⁾(一〇七節)。

「無情」の前半は、英采を中心にストーリーリイが展開しているかに見えるが、じつはそこにいない善馨こそが真の中心人物である。英采の教奇な身の上話を聞きながら亨植はつねに彼女を善馨と比較し、英采に軍配を上げているように見えるときも、実は深層の意識では善馨を選び、求めている。⁽⁴³⁾そして五日目の夜、ついに潜在願望は成就して、彼は善馨と婚約するのである。

婚約のあと亨植は、金長老が決めた婚約は善馨の愛を意味していないことに気づき、彼女が自分を愛しているかどうかを知りたくて悩む(九八節)。自分を愛しているかという亨植の質問に対して善馨は「はい」と答えるが、じつは質問の意味すら理解していない(九九節)。親の言葉が彼女にとっては至上命令なのである。亨植は、自分が夫妻から冷遇されたときに善馨が見せてくれた好意を同情にすぎないと見抜きながらも、彼女を失うよりはましだと考えている(一〇八節)。彼が二人のうち一人を選ばねばならない」と真剣に考えているように見えるときも、心を占めているのは善馨ただ一人である(一一四節)。⁽⁴⁴⁾亨植はこれほどまでに善馨で心がいつぱいなのに、彼女のほうは亨植の財産と学歴と容貌に不満を感じている。こんなギクシャクした関係は三浪津で少し融和されるが、根本的な解決は見ないまま終わる。

三枝壽勝は、このような亨植と善馨の関係を、李光洙小説に頻出する「愛不在の夫婦」モチーフの例であるとした。⁽⁴⁵⁾しかし筆者は、この二人のあいだに愛がないわけではないと考える。善馨に対する亨植の気持は切実だし、善馨の嫉妬も愛の一つの形とみなしうる。むしろ筆者は、亨植の配偶者となる善馨がもつ特権的な地位に注目したい。主人公に心を捧げる若くて魅力的な女性が傍らににいるにもかかわらず、配偶者が絶対的な位地にありつづけるという構図を、ここでは「特権的な配偶者」モチーフと呼ぶことにする。このモチーフは、「土」(一九三二)

【愛】(一九三八)『元曉大師』(一九四二)など、李光洙の後期の長編小説にあらわれる。【土】では許崇と妻の尹貞善に愈順、【愛】では安賓と妻のオンナムに石荀玉、そして『元曉大師』では元曉と妻揺石公主に阿慈介の關係がこれに該当する。羅憲錫の面影が留學時代から離れるほどに薄くなつていくのとは逆に、こちらが後になつて現れるのは、いったい何を意味するのか。英采の場合と同じように善鑒にも實在の人物が投影されていたとするなら、当然のことながら、それは彼の伴侶となつた許英肅ということにならう。

結論から言ふと、【無情】における善鑒の描かれ方を理解するためには、作者と許英肅の關係、そして、李光洙がこのころ発病していた結核という要因を無視することができないと筆者は考えている。これまでの【無情】研究においては、許英肅の存在も結核との関わりも注目されてこなかった。だが当時、結核を発病することは死の宣告とも同じであつた。発病の衝撃は、そのとき書いていた文章にも痕跡を残したのではないだろうか。以下では、その痕跡をたどりながら【無情】と結核と許英肅との関わりを考えてみたい。

(二)【無情】と結核

十九世紀から二十世紀前半にかけて、結核は全世界で猛威をふるつた。結核自体は昔からあつた病気であるが、機械文明が発達して工場労働が始まると、劣悪な環境とあいまつて蔓延するようになった。結核が近代病と呼ばれるゆえんである。日本でも明治に入つて工場労働が始まると結核患者が激増する。李光洙が再留學したのは、日本で結核の勢いがピークを迎えようとしているときだつた。一九一八年、日本における結核死亡者は十四万人を越えて最高潮に達する⁽⁴⁶⁾。

抗生物質ができる以前には、結核への対抗手段は海辺や高地への転地療法や、肉、卵、牛乳を摂取する栄養療法くらいしかなかった。日本でも鎌倉海浜院、茅ヶ崎南湖院などの海辺の療養院が有名である。一九一六年初め

に肺結核で死んだ羅憲錫の恋人崔承九は、その前年に発表した隨筆「不満と要求」のなかで、鎌倉の海辺で美味しいものを食べていると書いているが、おそらく療養のために行つたのだろう。李光洙も一九一八年の夏に沼津の海辺に滞在している⁽⁴⁸⁾。

この一九一〇年代に朝鮮からの留學生もたくさん結核に倒れたことは、『學之光』の消息欄に毎回のように見られる、病氣による帰国と死亡の記事によつて推測される。異国でこの病氣にかかったとき、面倒を見てくれる人間がいるかどうかは生死の分かれ目であつた。羅憲錫は、十分な看病をせずに恋人の崔承九を死なせてしまったことへの後悔を、次のように述べている。

私が、昼夜、心を痛め嘆き胸を打つて後悔したのは、「なぜ、自分は友人のために勉強をやめて徹夜して看護してやれなかつたのか」ということだつた。「自分が真心を尽くしその友人に慰安を与えることができたら、その人は決して死ななかつただろう」ということだつた⁽⁴⁹⁾。

結核を発病した李光洙の脳裏には、一年前にこの病氣で亡くなつた崔承九が浮かんだに違いない。李光洙が中学時代に読んだ作家、高山樗牛、国木田独步、網島梁川はみなこの病氣で亡くなつて⁽⁵⁰⁾いる。当時、結核による死はきわめて身近であつた。一九一七年一月十七日に執筆された短編「彷徨」は、李光洙自身と思われる病氣の留學生を主人公として、尋常でない虚無と厭世の雰囲気をつたよわせている。

麹町の寄宿舎で三日前から風邪で寝ている主人公は、自分の心臓の鼓動を聞きながら、「見ただけでも腹が立つ本か劇みたい⁽⁵¹⁾な」この世に対して未練はないと考える。彼のもとには一日三回、温かい牛乳(結核の栄養療法を思わせる)が匿名の篤志家から届けられ、また友人は心から彼の病勢を心配してくれるが、そんな厚意さえ「臨

終の病人にカンフル注射を施すのと同じ⁽⁵²⁾で、本人の苦痛を引き伸ばすだけに思われて煩わしい。ついには民族に対する思いまでもが色あせて見える。自分は他の愛国者のように「朝鮮と婚姻」できなかった人間だ。寂しいときは朝鮮を恋人とみなそうと努力したが、「僕の朝鮮に対する愛はさほど灼熱もしなかったし、朝鮮が僕の愛に答えてくれたとも思われない⁽⁵³⁾」と考える。すべてが空しくなった彼は「僧になりたい」と思い、十八歳で処女寡婦になった故郷の叔母が十年間節を守ったあと金剛山に入って尼になったという話を思い出して、彼女を追って僧になる自分の姿を想像するのである⁽⁵⁴⁾。

【無情】で亨植が「僧になりたい」という言葉を口にするとき、その虚無感⁽⁵⁵⁾は「彷徨」の主人公と通底している。

朝鮮の文明のために、また自分の名譽のために努力しようという気が、いつべんに消えてしまったようだ。(中略) これまでの自分の生活がまったく無意味でつまらないものに見えて(中略)すべてが恥ずかしくてどうでもいいことのように思われる。(七四節 筆者訳【無情】平凡社 二〇〇五 以下同じ)

僕のこれまでの人生の価値は何で意味は何なのだ。いまずぐこの生活を全部投げ出して、どこか人のいない遠い場所に引きこもって隠遁したい気分だ。(七四節)

ところがこの直後、ハン牧師が善馨との婚約の話を持ちこむと、亨植は自分の未来が開かれたことに心を躍らせる。絶望から希望への転回が起きたのである。

「善馨と僕が婚約」という言葉は、聞いただけでもうれしかった。(中略) 好きだった美しい人と、一生の願いだっただ西洋留学！ このうち一つだけでも亨植の心を惹くのに十分だというのに、まして両方である。(七六節)

このとき、作品の外にいる作者自身にも絶望から希望への転回が起きていた。「彷徨」を書いてからひと月後の二月二十二日、二十六歳の誕生日を迎えて書いた随筆「二十五年を回顧して愛妹に」のなかで、李光洙は最近おきた心境の変化を次のように書いている。

先だって僕は、自分に対してひどく失望した。(中略) いっそ社会と恩人の期待を打ち棄てて山に入って僧になるか、田舎に隠れ住んで自分の手で畑でも耕そうか(中略)と考えたこともあった。そのときの僕の心は寂寞と失望と悲しみにおしひしがれて死んでしまいうだった。僕には何の希望もなく、勇気もなく、熱情がなく、消えた灰のように冷えきっていた。同族や人類のために努力するのだなどという理想が消えたのはもちろんのこと、一個人としてこの世に生きていこうという考えすら失せてしまった⁽⁵⁶⁾。

そのとき「僕」の前に、長いこと忘れていた妹の面影が浮かぶ。「私は泣いています。兄さんのために」という妹の声が聞こえ、「僕」は身体を震わせて再起を誓う。

僕はふたたび生きることを決心した。おまえのために、あの恩人たちのために、そして大切なおまえと恩人を抱いてくれるあの大地のために、僕は死なずにふたたび努力することを決めた⁽⁵⁷⁾。

体験と創作のあいだ(波田野)

妹よ！　こうして僕はよみがえった。そして今日を迎えたのだ。⁽⁵⁸⁾

新たな気持で誕生日を迎えた「僕」は、人生を演劇にたとえてこう書いている。

僕の生活の序幕は昨日で終わり、今日から僕の生活は演劇の中間に入るように思われる。僕の手握られたプログラムの重要な部分が今日から始まるという気がする。

序幕は失敗だった。僕はたくさんのお客に失望をあたえた。だがこのあとに中幕と大団円が残っているから、彼らを満足させる機会はまだ充分にある。

僕はいま楽屋で、心をこめて扮装を整えているところだ。僕の唇には希望の微笑みがある。⁽⁵⁹⁾

この文章からは再起への意気込みが伝わってくる。筆者は以前の論文でこの文章を分析し、五山学校での教師生活を失敗とみなし、民族教育を放棄して再留学をしたことに対して呵責を感じていた李光洙が、自らの弱みを「無情」のストーリーに織り込んで語ることによって精神的な再起を果たしたのだと解釈した。⁽⁶⁰⁾　しかしながら、「無情」と「彷徨」に通底する虚無感が、作者の精神的トラウマだけでなく、結核という身体的な危機から来ていたとするなら、この再起は比べようのないほど深刻な様相を帯びることになる。それは、文字通り「死への絶望」から「生への希望」への転回ということになるからだ。

(三)「無情」と許英肅

「二十五年を回顧して愛妹に」で「僕」を再起させたのは、「長いこと忘れていた妹」とされている。李光洙に

は妹が二人いたが、下の妹は幼くして亡くなり、もう一人は満州の營口に嫁いでいた。⁽⁶¹⁾「無情」にも「咸鏡道に嫁した妹⁽⁶²⁾」としてちらりと出ているこの妹について、李光洙は多くを語っておらず、手紙の話もこの随筆にしか出てこない。妹からの手紙には誕生日プレゼントとして幸運の四葉のクローバー（原文は「四葉槿」）が同封されており、「去年の秋、一日中がんばってこれを探しました」と書かれていたことになっている。しかし、平安北道の農村で育って満州に嫁した妹が本当にそんなことをしたのだろうか。これはむしろ都会の夢多い女学生がしそうな行為である。

李光洙に四葉のクローバーを送ったのは、そのころ東京女子医専に在学中だった許英肅だったと思われる。異国で結核にかかった貧しい留学生の前に、経済的なゆとりと医学知識をもった女性が見病を申し出て、彼を絶望から希望へと再起させたのである。二十年以上のちに、ある雑誌のインタビュー記事で許英肅は次のように回想している。

ところが、会ったときの春園はひどいありさまでした。咳をするたびに、見るも恐ろしい血痰を吐き出す、肺結核患者だったのですから。誰がそんな彼に近づくの喜びますか。おまけに親しい人間もない東京に来てそんな身体になったのですからね、世話をしてくれる人など、なおさらいませんよ。世話をする者がいなければ、彼は間違いなく、いくらかたず死にように思われました。それで私が先生に話をして、彼の面倒をみてあげたのです。⁽⁶³⁾

つづく結核についての意見は、おそらく彼女の若いときからの信念ではなかったかと思われる。

この肺結核という病気を世間ではかならず死ぬ病氣だと思つていますが、そうではありません。時期を逸せず、経済を犠牲にして医者⁽⁶⁵⁾の指示どおり規則的な治療を受けさえすれば、かならず治る病氣です。

「経済を犠牲にして」とは「金に糸目をつけず」ということである。だが一九一七年一月の李光洙は非常に貧しかった。このとき金性洙からの仕送りは月に二十円で、『毎日申報』の『無情』連載は月五円にすぎず、新学期で大学の授業料も納めなくてはならないというのに、「授業料を納めることができずに学校に行けない」ような状態だった。⁽⁶⁶⁾絶望するのも当然であろう。そんな彼に希望への転回が訪れた。李光洙は許英肅から助力を得られることを確信したのである。では、許英肅はなぜ李光洙の面倒を見ようと考え、実行したのだろうか。

許英肅(一八九七―一九七五)は、ソウルの裕福な家庭で四人姉妹の末娘として生まれた。三人の姉は当時の風習にしたがって深窓で育つて早婚をしたが、彼女だけは新教育を受けた。⁽⁶⁷⁾九歳のときに母親を失っている。⁽⁶⁸⁾一九一四年四月に東京女子医専に入学し、李光洙と知りあつたのは三年生のときで、彼よりも五歳年下の彼女は二十歳を越えたばかりだった。

一九二九年に李光洙は腎臓結核のために左の腎臓を切除する大手術を受けたが、このとき病床記事を書くために訪問した方應護の前で許英肅は当時のことを回想し、李光洙の下宿に初めて薬を届けたときは、男性の下宿を訪ねるのもさることながら、李光洙が「先生として崇拜している方」だったので、なお恥ずかしかったと語っている。⁽⁷⁰⁾それから十八年後の『女性』誌のインタビュー記事で、四十二歳の許英肅はずっとあけつびろげに李光洙とのことを語っている。五道踏破旅行から帰つたあとは李光洙が薬をもらいに自分のところに通つてきたこと、家では嫁に行くようにと言つたが、自分が看護しなければ李光洙は数年で死んでしまうように思われ、将来きつと社会に役立つことをする人物だと信じて世話することにしたこと、彼を愛していたわけではなかつたこと、二

人の関係は恋人同士というより兄と妹のようで、結婚後も四、五年は「春園先生」と呼んでいたことなどを語り、その後の家庭生活も「春園の看護をするのが全生活でした」と述べている。⁽⁷¹⁾

もちろん許英肅のこのような突き放した話し方には、夫婦の馴れ初めのことを話すときにつきものの照れ隠しが作用していたはずである。しかし、それを差し引いても、この回想には当時の二人の特異な関係を想像させるものがある。一九一七年初めの李光洙は『毎日申報』に論説と小説を発表して輝かしい脚光を浴びていた。二十歳を越えたばかりの許英肅は、そんな彼を将来民族のために重要な働きをする人間だと思つて尊敬し、彼の面倒を見ることが医学生である自分が民族に奉仕する道だと考えたのだろう。この推測を強めるのは、李光洙が二十五歳を回顧して愛妹に「の二日前に書いた論説「天才よ！ 天才よ！」の一節である。

いま朝鮮はまさに天才を求める時です。あらゆる種類の天才を求める時です。自分の食事を抜いて天才に食べさせ、自分の着物を脱いで天才に着せ、いや、自分の肉を切り取つて天才に食べさせ、自分の皮を剥いで天才に着せる時です。⁽⁷²⁾

民族の運命は天才の肩にかかつているのに、朝鮮の人びとはむしろ彼らを押しつぶし、枯死させているという弾駭には、自らの運命に対する李光洙の嘆きと怒りがこめられている。そして「天才を守れ」と叫ぶ李光洙の主張がこのとき許英肅に伝染したのではないかと思われるのである。

若い女性である許英肅は、おそらく李光洙に対して恋心を抱いたと想像される。しかし潔癖な彼女は妻子のある彼への感情を否定して、むしろ民族への義務という名分を押し立てて接し、それが『無情』のなかでの善馨と亨植の関係のきこちなさとしてあらわれたのだと考えられる。善馨にとって亨植と婚約せよという父の言葉が至

上命令だったように、許英肅は李光洙の世話をするのが民族に対する神聖な義務であると信じたのである。李光洙は、彼女の自分に対する好意が愛によるものか同情によるものかを知りたくて悩み、それが『無情』では亨植の煩悶としてあらわれたと考えられる。若い女性から経済援助を受けることに李光洙の自尊心は傷ついたであろうし、自分は不浄な感情によって彼の面倒を見ているのではないという許英肅の自尊心もあったことだろう。こうして彼らの自尊心の葛藤は、『無情』の後半部に描かれる亨植と善馨の自尊心の葛藤としてあらわれることになったのである。

五、おわりに

結婚後の家庭生活でも李光洙の健康がつねに第一の問題であったと、許英肅は先のインタビュー記事で述懐している。彼らのこうした関係が李光洙の後期の小説にあらわれる「特権的な配偶者」モチーフにつながったのではないかと思うが、本稿では示唆にとどめておく。とりあえず、長編『無情』の後半における善馨の特権的な地位が作品の外にある要因によって決定されていたことは、以上で明らかになったと思う。ただ、前半における善馨の姿が許英肅を投影しているのかどうかは、最後まで判断がつかなかった。そこでの善馨は「富と美貌と教養」によって亨植を一時にして魅了し、彼の心の深層に欲望の炎を点火させる重要な人物であるにもかかわらず、描写が抽象的で力を欠いており、実在人物をモデルにしているように見えないからである。もしかしたらこの時の善馨は李光洙が東京で出会って心をときめかせた若い女性全体を象徴しており、そうやって創りだされたヒロインの内部に、あとになって許英肅が入り込んだのかもしれない。それとも知り合ってしばらくは許英肅がどういう女性かわからずとまどったために具体性を欠く描写になったのか、あるいは、最初の長編小説に着手したばかりの二十五歳の作家李光洙の力量の問題であつたのかもしれない。

いずれにせよ、『無情』の前半部を書いているときの李光洙が、生と死とのほざまにあつたことは確かである。七二節の最後は、「亨植は完全に枯死してしまうのか、もう一度どこかに根を張って生きるのか、これは将来を見なくてはわからないことだ」と締めくくられている。李光洙がここまで書いて筆をおいたとき、東京で死を予感した二十五歳の青年の心はまさに「彷徨」していたのである。

*本研究は二〇〇六年から三年間、日本学術振興財団の助成を受けておこなった研究成果の一部である。(課題番号18320060)

*本稿は二〇〇八年八月二十二日にソウル大学で行なわれた韓国現代文学会における口頭発表「이광수의 제이유학에 대해서」の内容を発展させたものである

註

(一) 論文は以下の八編である。「李光洙の民族主義思想と進化論」、「朝鮮学報」第一三六輯 一九九〇／「李光洙の

自我」、「朝鮮学報」第二三九輯 一九九一／〈文学の価値〉

について「大谷森繁博士還暦記念朝鮮文学論叢」杉山書店

一九九二／「獄中豪傑の世界」『朝鮮学報』第一四三輯、

一九九二／「無情」の研究(上)(中)(下)、『朝鮮学報』

第一四八輯、一九九三／第二五二輯、一九九四／第一五七

輯、一九九五／「上海報告」、「鼎立新潟女子短期大学国際

教養学科北東アジア地域研究報告書」、一九九五。これら

は「李光洙・『無情』の研究」(白帝社、二〇〇八)に収め
てある。

(2) 前掲「李光洙・『無情』の研究」、二五四頁

(3) 筆者が「瓊姫」をはじめて読んだのは一九九一年に刊

行された「韓国女性小説選1910-1950」(徐正子編、

甲寅出版社)に収められた「경희」によってである。

(4) 羅憲錫の全集と評伝が刊行されたのは二〇〇〇年代に

入ってからのことである。李相瓊編集校閲「나혜석 전집」

(太學社、二〇〇〇)、羅憲錫記念事業会刊行・徐正子編

- 【原本정철 라혜석 전집】(國學資料院、二〇〇二)、評伝『인간으로 살고 싶다—영원한 신여성 나혜석』(李相瓊著、한길사、二〇〇〇)があいついで出版された。なお、金允植は一九八六年の『李光洙와 그의 시대』(한길사)において「어린 벗에게」のモデルは羅憲錫だと指摘していたが、当時の資料的な制約のために、李光洙と羅憲錫は中学時代からの知り合いだろうと推測するにとどまった。(奎、一九九九、六二六〜六三三頁)
- (5) ただし本文中ではタイトルを日本語訳で表記する。
- (6) 「李光洙の第二次留學時代——『無情』の再読(上)」五、一九二七(大正六)年前半——『無情』と結核 参照
- (7) 실단(シルタン)については、前掲「李光洙・『無情』の研究」『無情』を読む(下)「三」ヨンチュエの救済」を参照のこと。三三六〜三四四頁
- (8) 「無情」九二節
- (9) 「크리스마스밤」の筆者は「거울(鏡)」だが、本稿で述べる「어린 벗에게」との細部の相似や小説の内容から見て、李光洙の作であることは間違いない。金榮敏は「거울」は李光洙の幼名「寶鏡」から取った筆名だと推定している。「이광수의 새 자료『크리스마스밤』연구」『이광수 문학의 재인식』소명출판、二〇〇九、二四頁 / 波田野節子「『無情』を書いたころの李光洙」『東立新潟女子短期大学紀要』四五号、二〇〇八 参照
- (10) 上掲 波田野論文 三三七頁を参照のこと。なお、金榮敏は前掲「이광수의 새 자료『크리스마스밤』연구」と「이광수 초기 문학의 변모과정—이광수의 새 자료『크리스마스밤』연구(2)」『이광수 문학의 재인식』所収)において、新たに発見された「學之光」八号に掲載されている李光洙の3編の作品を分析し、「크리스마스밤」を書いたあと李光洙は体制順応へと変貌したとしているが、筆者としては、本稿(上)で述べたとおり、当時の李光洙のスタンスは一貫していたと考えている。
- (11) 「분주하신데」。「크리스마스밤」では「學之光」八号三八頁に1回だけだが、「어린 벗에게」では「青春」第九号の一二二頁に2回、一二二頁に1回出てくる。
- (12) 鉄道自殺未遂は、明治学院時代に李光洙が書いた最初の日本語小説「愛か」にも出てくる。
- (13) 布袋敏博「學之光」小考」『大谷森繁博士古希記念朝鮮文学論叢』白帝社、二〇〇二／解題 권보드레「學之光」第八号原文」『民族文学史研究』通算三九号、二〇〇九、三六七〜三七六頁。
- (14) 作者名は本文では「長白山人」、目次では「원우」になっているが、これも内容から見ても李光洙が書いたものである。波田野節子「『無情』を書いたころの李光洙」／金

- 榮敏「이광수 초기 문학의 변모과정—이광수의 새 자료『크리스마스밤』연구(2)」参照
- (15) 「어린 벗에게」は、「無情」の執筆をおえた直後、すなわち一九二七年五月ごろに書かれたと筆者は推定している。「無情」の再読(上)註(74) 参照
- (16) 金允植は、手紙の相手として想定されているのは「青春」の読者であり、李光洙が教師の立場で幼い学生に話しかけたものだとしている。「李光洙와 그의 시대」、六二六頁
- (17) 「青春」一〇号、二六頁。原文「여기서 바로 北으로 날아가면 그대게신故郷일것으로소이다。」
- (18) 同上 二七頁。原文「이러한中에도 설어지지 않는 것은 愛人이라 그대와 一蓮의 생각은 心中에 雜念이 업서질 사록에 더욱 鮮明하고 더욱 懇切하게되나이다。」
- (19) 同上。原文「그네의 손을 잡고 逍遙하였스면 잊더라」
- (20) 「青春」一一号、一三七頁。原文「나는 어이하야 닛스며 金娘은 어이하야 닛스며 그대는 어이하야 닛스며 나는 무엇하러 小白山中으로 다라나고 그대는 무엇하러 漢江가에머무나잇가。」
- (21) 羅憲錫については徐正子氏のご協力により、以下の資料を確認することができた。この場を借りて氏に感謝の意を表する。

1. 進明女学校学籍簿・卒業生名簿
 2. 女子美西洋画高等師範科学籍簿
 3. 女子美選科普通科学籍簿(용범모「画家羅憲錫」二〇〇五 현암사 所収)
 4. 大正3年度 女子美術学校成績用紙 選科普通科第二学年(同上)
 5. 大正5年度 動情表(李相瓊「인간으로 살고싶다」一一二五頁)
 6. 大正6年度 成績表 西洋画科高等師範科第三学年(용범모 前掲書所収)
- 女子美の書類は草書体で記されており、非常に読みづらかった。そこで女子美術大学に連絡のうえ、これらの資料をもって、二〇〇八年七月十一日(金)に同大学相模原キャンパスを訪問し、歴史資料室室長の内藤幸恵氏と歴史資料編纂担当の遠藤九郎氏のご協力を得て、学籍簿と成績原簿を解読した。親切に対応してくださったお二人に心から感謝する。なお、これらをもとに羅憲錫の東京時代の年表を作成したので、参考までに載せておく。(末尾参照)
- (22) 「東京工業大学卒業生名簿索引」の大正三年七月卒業の項に名前がある。東京工業大学総務部印刷室 昭和十七年、五二頁
- (23) 「朝鮮人概況第二」荻野富士夫編「特高警察関係資料

集成 第32巻」不二出版、二〇〇四、五六頁

(24) 羅景錫の娘である羅英均によれば、鄭泰信は羅景錫の友人で社会主義者だったという。『日帝時代、わが家は』みずす書房、二〇〇三、二七頁

(25) この時期のことを語った随筆「나의 여교원 시대(私の女教員時代)」「三千里」一九三五年七月 徐正子編『品月羅惠錫全集』李相瓊編「나혜석 전집」所収のなかで、羅惠錫は月給を貯めて一年後に東京に戻ったと書いている。しかし、女子美の学籍簿によれば彼女が復学したのは二学期であり、勤情表の二学期の備考に「十月十四日」と記されている。註(21) 参照

(26) 上掲2冊の全集年譜および李相瓊の評伝では、羅惠錫は一九一五年一月から十一月まで休学して教員生活をしたことになっており、この夏の李光洙との接点は時間的に不可能である。しかし、一九一六年三月発行の『學之光』に載った「크리스마스반」の〇嬢には確実に羅惠錫の面影がある。そこで羅惠錫の東京での行動を調査したところ、李光洙は東京に来たばかり、羅惠錫は東京を去る直前、羅惠錫は復学の前に東京に戻っていたという推測のうえで時間的な接点を見出すことができた。(註(21)年譜 参照) 学籍簿が読みにくい草書体で書かれていることから、全集年譜作成のときに誤りが生じたものと思われる。

(31) 「젊은 꿈」博文書館、一九二六 未見

(32) 「젊은 꿈」自序「李光洙全集19」三中堂、一九六三、三四〇頁

(33) 「크리스마스반」を李光洙が体制に順応する前の最後の作品とみなす金榮敏は、この作品の核心は「祖国喪失体験」だが、李光洙がそれに対する心の整理をつけたのが一九一四年であつたために、回想のなかで時期がずれてしまったのではないかと推論している。(金榮敏「이광수 문학의 재인식」소명、二〇〇九、四七頁 註(35)) しかし、十年もたっていない、それもきわめて印象の深い時期のことをそれほど簡単に忘れられるとは思われない。この錯誤は意図的だったと、筆者は考えている。

(34) ①「그의 自叙傳」の主人公甘苦석はM中学校に留学しているとき、Yという大学生から親戚の女性Sを紹介される。ところが夏休みで帰省しているときに衝動的に結婚してしまい、東京にもどつてからSへの思慕に苦しむ。ここには〈兄の紹介〉と〈既婚者の恋〉のモチーフが使われている。(『李光洙全集9』、二九二―三〇六頁)。のちに早稲田に留学した主人公はSの愛した男性が肺病で死んだという消息を聞く。この部分には、結核で死んだ羅惠錫の恋人のイメージが見られる。(上掲、四三七頁)

②ロシアのチタで第一次大戦の勃発を迎えた主人公は、

体験と創作のあいだ(波田野)

(27) 本稿で〈兄の紹介／委託〉モチーフとしたのは、羅惠錫が友人に妹の保護を頼んだことを反映してか、李光洙小説にも「紹介」と同時に「委託」という形が見られるからである。「크리스마스반」と「어린 벗에게」では「紹介」だけだが、「그의 自叙傳」では「紹介／委託」である。ただし委託者は兄ではなく夫や恋人になっている。東京にいる羅惠錫が京都帝国大学に留学中の金雨英と婚約をし、そのあとも李光洙との交流がつづいたという体験が反映した可能性も排除できないが、ここでは「兄の紹介／委託」の変型とみなしておく。

(28) 「横歩文壇回想記」『廉想渉全集12』民音社 一九八七、二三〇頁。浦川登久恵はこの回想が一部事実と違っていることを指摘している。「モデル小説・廉想渉(해바라기)の分析」『朝鮮学報』第二百七輯、二〇〇八、九五頁。中編小説「해바라기」は一九二三年七月から八月にかけて『東亞日報』に連載された。

(29) 「女子界」二号消息欄。一九一七年十月十七日の女子親睦会臨時総会で、「女子界」編集部長に金徳成、部員に羅惠錫と黄愛施徳と許英順、賛助に田榮澤と李光洙が選任されたことが記されている。『毎日申報』に「開拓者」の連載が始まるのは、この年の十一月十日である。

(30) 「李光洙全集18」三中堂、一九六三、四六七頁

ロシア将校として翌日出征することになっている朝鮮人Rから突然、妻と妹を委託され、このあと行動をとにもすることになる。これは〈兄の紹介／委託〉モチーフの変形である。(上掲、三四七頁) なお〈兄の紹介／委託〉モチーフについては註(27)を参照のこと。

③早稲田に留学した主人公を北海道に留学という未知の青年Yが訪ねてきて、東京に留学している恋人のCを紹介し、保護を頼む。やがてCが主人公を愛するようになったために主人公は周囲から誤解を受ける。これも〈兄の紹介／委託〉モチーフの変型である。(上掲、四四四―四五五頁)

(35) 申性模(一八九一―一九六〇)独立運動家のちに政治家。李光洙が上海に行った一九一三年末には吳淞商船學校航海科の学生で、その後中国海軍少尉になっている。解放後の一九五〇年に国務総理代理をつとめた。

(36) 「文壇生活三十年의 回顧」『朝光』一九三六年五月号／「李光洙全集14」『多難한 半生의 途程』三九三頁

(37) 羅惠錫が離婚したのは一九三〇年十一月のことである。「離婚告白状」によれば、李光洙はこのとき仲裁を頼まれている。

(38) 羅惠錫「離婚告白状―靑丘氏에게」徐正子編『品月羅惠錫全集』／李相瓊編「나혜석 전집」所収

(39) 「巴里의 그 女子」同上

- (40) 一九三三年、『三千里』のインタビュー記事で、「어린 딸에게」のモデルの話が出たとき、李光洙は「全部嘘ですよ、呵々」と笑い飛ばし、「金一蓮という女性が生きているということですが」という記者の言葉に對しても、「あれは自分が勝手に金一蓮だと言つてまわっているのです」と答えている。モデル問題がずっとあったのだろう。(『李光洙氏外交談録』『三千里』一九三三年九月号、六〇頁) 参照
- (41) 波田野節子「無情」を読む(下)五 見る、ソニョン
- (42) ここには、外界が意識に与える刺激の時間的順序が、意識の動向において決定的な要因になるというベルクソンの考え方が見られる。「無情」を読む(上)白帝社一九五頁 参照
- (43) 前掲「無情」を読む(上)一 参照。亨植自身も自分の心の奥底にあった意識を、七五節で自覚している。
- (44) 「善馨と英采のうち一人を選ばねばならない」と考えた亨植は「長い思考の末」に結論に達するが、英采への言及は一言もなく、善馨のことしか述べられていない。「無情」を読む(下)六 三浪津への「中幕」三七五〜三七六頁 参照
- (45) 三枝壽勝「無情」における類型的要素について「朝鮮學報」第百十七輯、一九八五、三三頁。三枝は、〈愛不在の夫婦〉モチーフは李光洙の体験に由来するとみなし、「無情」では金炳郁の兄炳固夫婦もこのモチーフに該当するとしている。だが金炳固のモデルと推定される羅景錫には早婚した妻をどうしても愛することができなかつたという話が伝わっており、〈愛のない夫婦〉モチーフは李光洙自身の経験ではなく、羅景錫の実話から取り入れた可能性もある。羅英均著・小川昌代訳「日帝時代、わが家は」(みすず書房 二〇〇三 一三〜一六頁) 参照
- (46) 福田眞人「結核の文化史」名古屋大学出版会 一九九五 五〇頁。死亡者数は戦争中にこれより多くなるが、十万人あたりの死亡者数はこの年、二五七人に達して日本史上最高を記録している。
- (47) 『學之光』六号、一九一五年七月
- (48) (上) 註(97) 参照
- (49) 羅惠錫・浦川登久恵訳「生き返った孫娘へ」(『女子界』三号、一九一八)『科研報告書 植民地朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究』二〇〇九、九九頁
- (50) 明治中学時代の李光洙の読書歴については、波田野節子「獄中豪傑の世界—李光洙の読書歴と日本文学」を参照
- (51) 原文「마치 보기 역경나는 書籍이나 演劇과 같」『青春』第十二号 一九一八年三月 七六頁／『李光洙全集』四 六三頁

- (52) 原文「臨終의 病人에게 看護注射을 施하는 것과 같다。」『青春』第十二号 七八頁／『李光洙全集』四 六五頁
- (53) 原文「나의 朝鮮에 對한 사랑은 그리케 灼熱하지도 아니하고 朝鮮도 나의 사랑의 對答하는 듯하지 아니하였다。」『青春』第十二号 八〇頁／『李光洙全集』四 六七頁
- (54) この叔母の話は「少年の悲哀」で白痴に嫁いだ従妹の話とつながっており、また白痴に嫁いで処女寡婦となつたと金剛山で尼になつて死ぬ「나」のシルタンの話ともつながる。
- (55) ところで「無情」のストーリーから見ると、手塩にかけて育ててきた学生たちから造反された亨植がこのような気分になるのは自然であり、また「彷徨」に現れた虚無感も、もしかしたら原稿を送つて一段落ついたときに風邪をひいてあらわれた一時的なものにすぎないと考えられないことはない。だが、結核を発病している李光洙を世話するようになり、五道踏査旅行に出る前には恩師から診断の受けさせて送り出したという、許英肅のきわめて具体的な回想から見ても、李光洙がこの冬に結核を発病したことは間違いない。このころの李光洙の行動と周囲の状況を総合して見ると、彼の発病はやはり「彷徨」が書かれる前ころという推定に落ち着くことになる。
- (56) 原文「집때에 나는 내게 對하야 아주 失望을 하였었다。」

体験と創作のあいだ(波田野)

- (中略) 차라리 社會와 恩人의 期待를 다 저바리고 山에 들어가 죽이 되거나 食골에 숨어 제 손으로 땅이나 팔아 하여도 보고(中略)한 적도 있었다. 그 때에 내 마음은 寂寞과 失望과 슬픔에 둘러 거의 죽을 뻔하였다. 내게는 아무 희망이 없고 勇氣가 없고 熱情이 없고 오직 식은 재와 같히 싸늘하였었다. 同族을 爲하야 힘쓴다든지 人類를 爲하야 힘쓰는 다는 지하는 이상이 슬어짐은 勿論이 아니와 一個人으로 이世上에서 살아가라는 생각까지도 없어졌었다.」(『十五年을回顧하여 愛妹에게』『學之光』十二号 一九一七年四月 五一頁／『李光洙全集』四 二七九頁 文末に(一九一七、二、二二)と執筆日付がある。
- (57) 原文「나는 다시 살기를 決心하였다. 너를 爲하야, 저 恩人을 爲하야. 그리하고 貴重한 너와 恩人을 안아주는 저 땅을 爲하야 나는 다시 살고 다시 힘쓰기를 作定하였다.」同上
- (58) 原文「두이야! 이리하야 나는 도로 살아났다. 그래서 오늘을 當하게 되었다.」『學之光』十二号 五二頁／『李光洙全集』四 二八〇頁
- (59) 原文「내 生活의 序幕은 어찌까지 애이 난 것 같다. 오늘부터 내 生活은 演劇의 中間에 入하는 것 같다. 내 주먹에 쥐었던 프로그람의 重要な 節次가 오늘부터 展開되는 것 같다. 序幕은 失敗였었다. 나는 여러 觀客에게 失望을

주었다。그러나 이 압해 中幕과 大團圓이 남았스니 아직 그네를 滿足시킬 機會는 넉々하다。 나는 只今 樂屋에 잇서々 精誠으로 扮裝을 하는 中이다。 내 입설에는 希望의 微笑가 있다。『學之光』十二号 五二〃五三頁／『李光洙全集』二八二頁

(60) 白帝社 二七八頁、註(32) 二八三頁

(61) 「李光洙氏와 交談錄」『三千里』一九三三年九月号 五九頁／妹の長女の手紙 尹弘老「李光洙文學과 삶」『資料 7 中國에서 보낸 春園의 血肉의 편지』國學研究院 一九九二 二二五頁

(62) 「無情」六二節「結婚した妹は家族と一緒に咸鏡道に住んでいるので、この四、五年は会ったことがなく(後略)」

(63) 「學之光」十二号 五三頁／『李光洙全集』二八一頁

(64) 原文「그러나 맞나본 春園은 말이 아니였어요。 보기에도 소름이 끼치는 혈담을 기침끝마다 각각 뱉어내는 페 결해 환자였으니까요。 그러니 뒤가 가까이 대하기를 좋아하겠어요。 그런데다 四顧無親한 東京에서 그런물이 되었으니 더더구나 돌보아 줄 사람이 뒤 있겠어요。 돌보아 주는 사람이 없으면 그이는 꼭 얼마있어 죽을 사람갈드군요。 그래 내가 先生께도 말을 하고 해서 그이를 돌보아 주었습니다。」『나의 自敘傳』『女性』第四卷第二号、一九

三九年二月号、二六頁。文中で許英肅は、李光洙が女子醫專付屬病院に來診に來て初めて會ったと語っているが、これは記憶違いであろう。一九二九年の「文藝公論」のインタビュー記事では、留學生の會合のあと知りあつたと語っており、回想の時期や會つた状況から見てもこちらの話に信憑性がある。なお、『女性』誌にこの記事が掲載されていることを教えてくださった山田佳子氏に、この場を借りて感謝の意を表する。

(65) 原文「이 폐결핵이라는 병을 세상에선 꼭 죽는 병으로 하지만 그렇지 않습니다。 시기를 잊지 않고 경제를 희생해서 의사의 지시대로 규칙적 치료를 받기만 하면 만다시 낫는 병이지요。」同上

(66) 「나의 最初の 著書」『三千里』一九三二年二月／『李光洙全集』二六八頁 李光洙の當時の經濟狀態については、本稿(上)の(五)「無情」と結核 参照

(67) 「許英肅氏와 네분兄任」『三千里』一九三二年二月号 五二〃五七頁。前掲「女性」誌インタビュー記事 二六頁。前者では「漢城中学校」を出たとあり(五六頁)、後者では「進明の普通科と女高」を出たとある(二六頁)が、本人が語っている後者を取った。

(68) 前掲「女性」誌インタビュー記事で、許英肅は九歳の時に母はこの世を去ったと語っている。すると本稿(上)

で言及した、李光洙との戀愛に反対した母親は、許英肅の継母ということになる。

(69) 「女医界」八六号(東京女子醫學專門学校発行 一九一四年三月)掲載の「大正三年度入學者氏名」に許英肅の名前がある。なお、許英肅の次女李廷華氏からいただいた調査のための委任状を提示して、東京女子醫專の後身である東京女子医科大学の史料室に資料の調査をお願いしたところ、とても親切に対応していただいた。委任状を出してくださった李廷華氏と、対応してくださった東京女子医科

大学資料室の後藤明日香氏に、この場を借りてお礼を申し上げる。大正7年(大正6年度)卒業生名簿の別科に許英肅の名前があり、卒業写真も見ることができた。

(70) 春海「春園病床訪問記」『文藝公論』創刊号、一九二九、六二頁

(71) 前掲「女性」二七頁

(72) 一九一七年四月「學之光」第十号、一一頁／『李光洙全集』五二頁。文末に(二月廿日夜)と記されている。

羅憲錫の日本留学時年表

1913 (大正2) 年	4/15 私立女子美術学校入学西洋画選科普通科に入学 ⁽¹⁾
1914 (大正3) 年	4 月 普通科2年生に進級 7 月 兄の羅景錫が蔵前高等工業学校を卒業 崔承九と恋愛 12/3『學之光』3号に「理想的婦人」を發表 一時帰国。父が結婚を強要し、日本に戻れなくなる
1915 (大正4) 年	3 学期 登校できず欠席 ⁽²⁾ (4 月の1 学期にいったん除籍になったと思われる) 9 月 李光洙が東京に再留学 兄の羅景錫が朝鮮に帰国 ⁽³⁾ 2 学期途中、10 月4 日に選科普通科2 年生に復学 12 月10 日 父死亡 年末、崔承九が療養のために帰国
1916 (大正5) 年	1 月 本校寄宿舎に転居 (菊坂の校舎の隣) ⁽⁴⁾ 3/4『学之光』8 号に崔承九死亡記事 4 月 選科普通科3 年生に進級 9 月 (2 学期) 西洋画高等師範科 (2 年生) に転科 10 月28 日 転居 ⁽⁵⁾ 12 月 転居 ⁽⁶⁾
1917 (大正6) 年	4 月 高等師範科3 年生に進級 4/19『学之光』12 号に「雑感」を發表 7 月『學之光』13 号に「雑感—K 姉に与う」を發表 夏休み帰省の途中、京都に滞在して金雨英と交際 10 月17 日『女子界』編集部員 ⁽⁷⁾ になる 12 月 保証人変更：埴原悦二郎 居所：芝区芝公園5 号
1918 (大正7) 年	3 月22 日 私立女子美術学校を卒業 3/22『女子界』2 号に「경희」を發表 4 月 帰国

(1) 羅憲錫の学籍簿には以下のように記されている。(×は判読不明)

原籍 朝鮮京畿道×××龍仁 羅景錫妹
父兄職業 官吏
住所 神田区今川小路2 丁目2 番地 ×××
保証人 三好辰次
職業 医

(2) なお、この住所は同年四月に麻布中学校に編入した廉想渉の学籍簿の住所と同じである。
大正3 年度「勤惰表」

	欠席日数	授業日数
59	0	0
59	82	79
通計		
三学期		一学期

・2 年次の勤惰表である。2 学期まで欠席0 だったのに、3 学期は1 日も出席していない。父に結婚を強要されて日本にもどれず、そのまま麗水で教員をしたことだと推定される。

(3) 大正4 年度「勤惰表」(視認・筆写)
これは2 度目の2 年次の勤惰表である。書類では大正3 年度となっていたが、同じ学生に対し同年度に二つの勤惰表があるはずがないので、大正4 年度の間違いだと思われる。あるいは大正3 年度分の再履修という意味なのかも知れない。

欠席日数	授業日数	
17	57	三学期
14	63	二学期
		一学期

これを見ると一学期は一日も出席していない。0という数字も記入されていないので、いったん退学処分になったのだろう。備考欄に十月四日と記載されていることから、二学期のこの日に復学したと推測される。(遠藤氏のご意見)

二学期の授業日数は通常九月から十二月までの八十日から九十日間なので、63日という数字は復学した十月四日から学期末までの日数と推測される。(同上)

二学期に欠席が十四日あるのは、父の死亡による帰国のせいではないか。また、三学期に欠席が十七日あるのは、父の喪に服したか、崔承九に会うため一時帰国したためだと思われる。

(4) このときまで住所は三好辰次方だった。寄宿舎に移ったことで行動が自由になり、一時帰国することができたのではないだろうか。

(5) 転居先の住所 淀橋柏木979番地 中川方

(6) 転居先の住所 東大久保357 志村方

(7) 羅惹錫の二人目の保証人として記載されている「植原悦二郎」(ただし「悦」の字は非常に読みづらく、遠藤氏は「隠」と判読した。筆者が植原悦二郎の名前を知って「悦」とも読めることに気づいた次第である)は、大正デモクラシーの政治学者で一九一七年の総選挙で衆議院議員となり、以後も戦後まで在職した「植原悦二郎」の可能性がある。黎明会や新人会とも関係があった金雨英とのかかわりだろうか。(浦川登久恵「モデル小説・廉想渉」(해바라기)の分析『朝鮮学報』第二百七輯、二〇〇七、一一四頁)

(新潟県立大学教授)